

まぢの 営み

風土に根ざした

各地の気候風土や地域特性を生かした暮らし方・住まい方にこそ低炭素都市への「解」があるのではないかと、人々の営みが息づく、関西各地の特色あるまち並みや暮らしぶり、実験的な取り組みなどを追うことで、サステイナブルな都市の輪郭を探ってみました。

通りを挟んで右は築百年の古民家を生かしたヘアサロン、左はレトロモダンなメイクブラシのセレクトショップ(大阪・中崎町)

特集

②

「ルポ」

MOVE

ザ関西

中崎町

繁華街近くの懐かしいまち

大阪・キタのターミナル、阪急電鉄梅田駅付近から東へ向かって歩き、新御堂筋とJR東海道線の高架をくぐると、どこか懐かしい、昔ながらの二階建て民家と長屋が組み合わさったまち並みに出会う。今、若者たちの注目を集める中崎町である。町内の通りや路地には、外観はレトロな民家や長屋の風情を保ちながら、内装や扉、窓、看板、暖簾などに凝った、カフェやレストラン、雑貨店、美容室などが点在。眺めながら散策するだけで心楽しい気分になる。

「でも私がやって来た十年前は、この辺は昼でも人通りが少なく、夜は暗くて治安も悪い、寂れたまちでした」
一九九九年、中崎町の古い借家の二階家を改装し、設計事務所（創思舎）とカフェ・ライブハウス（創徳庵）を始めた建築家の久保昌徳さんは、入居当初をそう回想する。中崎町界隈は、大阪市内で震災に遭わなかった地区で、バブル期も再開発の波がおよばず、戦前のまち並みを残したまま二十一世紀を迎えることになった。
それまでのあくせくした仕事ぶりを変えたいと中崎町

へ移転した久保さんは、根っからの人好き、話好きもあってか、カフェに客が来れば、設計の手を休めて応対するのが秘かな楽しみとした。すると、若者が訪れて、「お店を開きたいのですが、どこか空き家はありますか」と話しかけてくるケースが増え、空き家探しや改装のアドバイスをすることも少なくなかった。「世の中は就職難で雇用も昔と違って不安定。それに自由に生きたい人たちが多くなった。でも人通りの多いまちで開業するには相当な資金がいる。それで家賃の安いこのまちが注目されたんです」

自然を取り込み、身の丈に合った都市居住

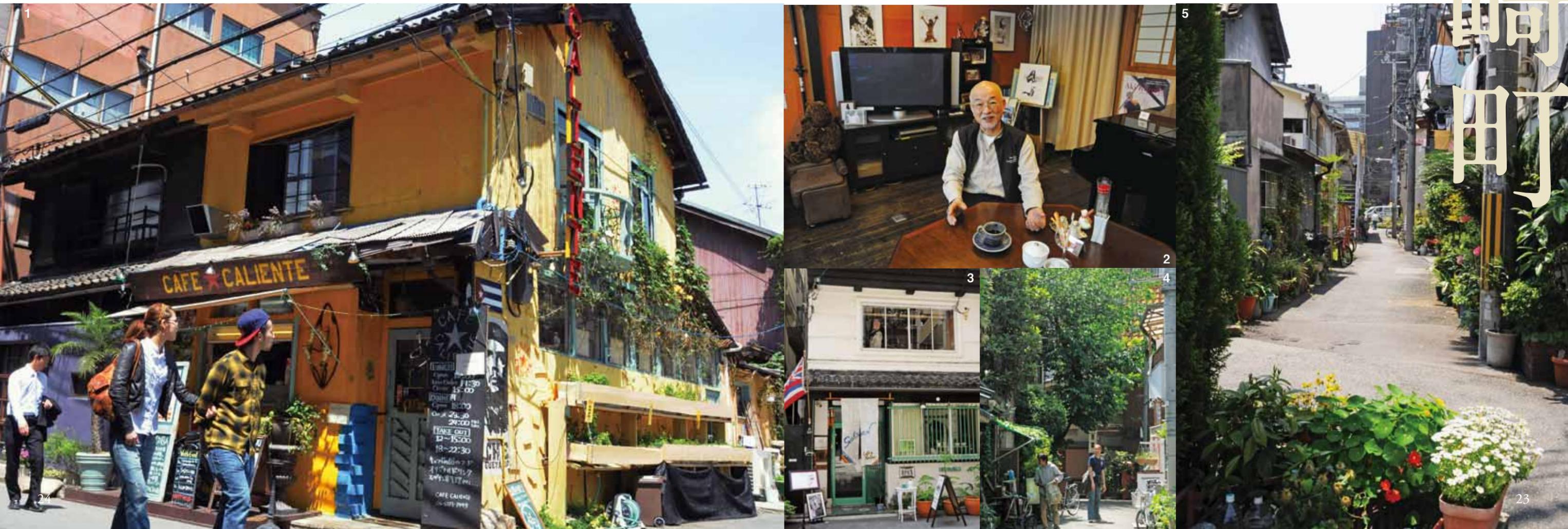
何年か経つと、そんな若者が開いた店が幾つも生まれしてきた。しかし中崎町はもともと商店街ではなく、庶民が暮らす借家に混じって、昔ながらの小さな印刷所や電機工務店、木工工場などが散在する、お年寄りの多い、よその人がほとんど訪れなかったまち。その界隈の表通りや裏通り、迷路のように入り組んだ路地に、自然発生的に若者たちが開いた小さな店が増えてきて、賑わいが生まれ活気が戻ってきた。そしていつの間にか、旧住民と新住民とが道端に落ちた煙草の吸殻を拾いあうなど、環境美化の取り組みも始まり、以前よりずっと暮らしやすいまちになった。

今でも、夏の夕べ、お年寄りが路地に



- ①ラテン系のキューバカフェ ②10年前、中崎町に設計事務所とカフェ・ライブハウスを開いた久保昌徳さん
- ③久保さんの事務所「創思舎」(2階)とカフェ・ライブハウス「創徳庵」(1階)
- ④狭い路地の奥に突然お洒落な店が現れるのが中崎町の面白さ ⑤懐かしい暮らしの匂いがする路地

庶民のまちの長屋リノベーション



蔓(いらか)の波、瓦屋根が続く
大宇陀の家並みを、森野旧薬園
(江戸時代中期に創設された
日本最古の薬草園)から望む



宇陀

伝統的な家並みを守り 住まい続ける 宇陀松山

風格のある古民家の魅力

奈良盆地東南の山間部に位置する宇陀市の中心、榛原から吉野方面へ少し南下すると、古代、柿本人麻呂が万葉歌を詠んだ阿騎野あきのという地、中・近世には城下町として発展した宇陀市大宇陀区がある。

真ん中を流れる宇陀川東岸には幾百の古民家から成る宇陀松山の家並みが南北に続く。その多くがどっしりとした瓦屋根の二階家で、二階が白や黒の漆喰壁、一階が焦げ茶や黒の格子窓。主な通りには防火の役割を果たす水路が築かれ、江戸時代、「宇陀千軒」と称されるほど栄え、明治以降、地方行政と経済を担ったまちの風格が漂っている。

「僕らが小さい時分、葛屋や油屋、紙屋、薬屋をはじめ、八百屋、豆腐屋、散髪屋と、ない店がないほどでした。今でもこれだけ古い家並みが残っているところは、ちよつとありません。それだけに、みんなが助け合って守っていかねければ」。二〇〇六年、「重伝建(重要伝統的建造物群保存地区)」に選定された宇陀松山の通りを眺めながら、「大宇陀まちおこしの会」会長の森本光俊さんはそう語る。

地元生まれ育った森本さんにとって、当初、そんな

椅子を出し、穏やかな表情で、のんびりと涼んでいる。そんな中崎町に、戦前どころかバブル期以前の暮らしを知らないはずの若者たちがやって来ると、不思議に「懐かしさ」を感じるそうだ。それは、みんなのDNAに過去の日本人の生活が刻み込まれているからではないか、と久保さんは言う。

軒を並べ人々が集まって暮らす長屋。各戸の軒下には草花が植えられ、壁には朝顔や蔦、またジャスマインが可憐な花と葉を茂らせ、路地を行き来する住民と訪問者の心を和ませる。都市空間にさりげなく自然を取り込み、過度な設備やエネルギーを使わず、身の丈に合った暮らし方で環境への負荷を極力抑えてきた、いわば昔ながらの「低炭素な暮らし」が、ここ中崎町にはある。

もつとも、久保さんが建築家の目で見れば、消防車の入れない道路、路地も多く、いずれ区画整理が必要になるだろうと指摘する。確かに周辺には高層マンションへの建て替えが始まった場所もある。しかし、その新たな入居者たちも、長屋の生活文化が息づく界限を行き来することで、潤いのある都会暮らしを楽しむことができるに違いない。

古き良き都市居住の風情を残す中崎町界限は、あまりに機能的に整備され過ぎたかに見える現代都市の中で、人々に肌の温もりと心の安らぎをもたらす、貴重な都市空間と言えるかもしれない。

①迷路のような路地の奥に日々の暮らしがある ②昭和の時代にタイムスリップしたかのようなまち並み





1



2

3



4



5

6



宇陀

- ①「大宇陀まちおこしの会」事務局長の裏 宗久さん(右)。明治期の町家を改装した、まちづくりセンター「千軒舎」にて
- ②大宇陀歴史文化館「葉の館」(細川家)に保存されている台所
- ③重要伝統的建造物群保存地区にあって、創業400年、今も現役で吉野葛を扱い続ける店

- ④「大宇陀まちおこしの会」会長の森本光俊さん
- ⑤⑥黒い瓦屋根に白壁——重厚で風格を感じさせる宇陀松山の家並み

加工などの技術を受け継ぐ住人たちが地道に家業を続けている。それは、大宇陀の人々が、近代以前からの質実な生き方、暮らし方、代々、受け継ぐことに意義、誇りを感じることでできる生活基盤、社会基盤を保ってきたからに違いない。

もともと、学校卒業後、関西や首都圏などの都会暮らしを選ぶ世代が増えた現在、どこの町内も高齢化が進み、空き家の数も増えている、と森本さんは言う。「しかし、『重伝建』に選定されたので、昔ながらの民家、家並みは今後ずっと国の支援で維持、修復することができます」

これからは、増えつつある空き家を借りて、住んでくれる新たな住人をどうやって見つけていくか。裏さんは、奈良県内の今井町や五條、大和郡山など古いまち並みを保つ地区と協力して古民家の空き家ネットワークを立ち上げ、大宇陀のまちに興味、関心、愛着を抱く人々が住みやすいしくみ、環境を整えていきたい、と言う。「特に大切なのは、これだけ木造の住宅が並び、災害弱者のお年寄りが多いので、それらの人と住まい、暮らしを守るための防災組織をつくること」。裏さんはそう言っていて、五年や十年先ではなく、自分の子から孫へ、さらにその子孫へと受け継ぎ、語り継いでいけるような「まちづくり」になれば、と付け加えた。



日々の暮らしと家を守るしくみづくり

祖父が東吉野から大宇陀に移り住んだ大工だったという裏さんによれば、宇陀松山の古民家が住まれ、保存されてきたのは、このまちに代々続いた大工、棟梁たちが、暮らしやすいまち並みをつくることに心血を注いできたからだ。「例えば、棟の高さ、軒の高さはこれぐらい、と、家の規模や配置、採光や風通しまで隣近所に配慮しながら一軒ごとに図面を描き、建ててきました。そんな、周りとの暮らし、人と人のつながりを大事にした家並みだったから、お互いが気持ち良く生活できたんです」

古風な商家造りの建物の奥では、今も地域の気候風土と特産を活用した葛や酒、醤油造り、和菓子作り、木材

まちの光景は「当たり前」だった。ある時訪ねてきた大宇陀時代の友人に「ここは何とええまちや」と言われ、初めてわがまちの良さを意識し、知れば知るほど愛着が湧いてきたという。

戦後の高度経済成長期以降、地場産業が衰え、人麻呂の歌に由来する「かぎろひを観る会」など、外向けの観光事業に力を注いできた大宇陀町(当時)だが、一九九〇年代、古民家などの文化財保護と研究に取り組む東京藝術大学建築科の学生たちによる大宇陀の古民家実測実習をきっかけに、住民たちが自分たちのまち、住まいの良さ、大切さを再認識し始めた、と言うのは、「大宇陀まちおこしの会」事務局長を務める裏宗久さんだ。

龍神村

全国から人を集める紀州の山里

◀ 秘境◀ から、芸術村◀へ

新緑の山々をぬい、和歌山県中央部を横断する日高川沿いの道を奥へ辿っていくと、棚田と幾つもの集落が点在する田辺市龍神村に入る。川を遡るに従って左右に連なる山々が高さを増し、やがて、深山幽谷の趣きを感じさせる旧道に沿って風情ある旅館や元湯が軒を連ねる龍神温泉街に至った。

かつて「秘境」と呼ばれた龍神村も、難所にトンネルが掘られ、道路が整備されて交通の便が良くなるとともに観光客も増え、暮らしの質が高まってきた。

「小さい頃、林業が盛んで景気は良かったけれど、田辺までバスで二時間もかかり大変でした。龍神出身というのが少し恥ずかしかったです」。そう語る原さださんは、若い時、大阪へ出て、結婚。二十数年前、家族そろって帰郷した。

田辺市龍神行政局産業建設課商工観光係長の吉本哲也さんによれば、一九八〇年代、急増する輸入木材に押されて林業が衰退し始めた龍神村では、中学校の廃校舎の活用と芸術による村おこしを目指し、龍神国際芸術村を開設。都会からアーティストが移り住み、新たな息吹が生まれつつあった。そんななかで、原さんは、横浜から来た元フランス料理のシェフから「龍神は宝の山や」と

龍神村

言われ、初めて地元の良さに気づいた。「そう言えば、泳げる川もあるし、空気もきれいで、食べ物もおいしい。自分の子供たちには自信をもって『龍神出身』と言ってほしかった」

龍神の「宝の山」に目覚めた原さんは、二〇〇二年、IターンやUターン組の女性たちと「龍神はーと」を結成。龍神の素晴らしいさをアピールし、地元出身の若い女性たちの帰郷を促進するために、龍神特産の柚子など農産物を活用した商品の開発、販売事業を始め、近年は関西ばかりか首都圏でも注目されてきた。

IターンもUターンも

現在、地元で龍神材の家具を製作、販売する松本泉さんも八〇年代後半、会社勤めをしていた大阪から、生まれ育った龍神村に戻ってきたUターン組だ。物づくりに憧れて脱サラ。一年間の木工修業ののち、空きのあった国際芸術村に入居した。「龍神の杉は色合いもいいし、艶もあって丈夫。それは山が高く、雨が多く、寒暖の差が激しいから」。しかし建築材としてはあまり多くの人に知ってもらえていなかった。松本さんは、使い勝手の良い家具を良心的な価格で提供して、龍神を訪れる人々に龍神材の良さを感じてもらうため、自らデザインした椅子やテーブルなどを一点ずつ精魂込めてつくり続けてきた。「木の家具は、傷が付いても家族の歴史になり、年ごとに値打ちが上がっていきます」

不幸にして国際芸術村の拠点だった廃校舎は十年ほど前に焼失。二〇〇二年、和歌山県と龍神村が「新世紀山村居住モデル実験事業」を始め、村内に「アトリエ龍神の家」（現在、九棟）を建設してアーティストを募集。陶芸家やチェンソーアーティストなどが入居してきた。

藍染め作家の計良容子さんもその一人。東京の藍染め工房に勤務時、ラジオ放送を聴いて応募。三年前の夏、龍神村の住民となった。「以前から田舎暮らしが夢で、山の中で温泉があつて、時々観光客が来て、藍染め体験もできる場所を探していました」。原料の「たで藍」に灰汁を注ぎ、日本酒やふすま（麦の外皮）を入れて発酵させる藍染めには、多量の木灰が必要だが、周辺には炭焼き職人がいて、良質の木灰が入手できる。そのうえ、龍神の人は親切で、藍染め体験を楽しむ人も少なくない、と計良さんは言う。「近くの子供さんが『お年玉をもらったから藍染め体験させて』と大切なお小遣いを持って来てくれる。とても嬉しいですね」。龍神行政局の吉本さんによれば、〇五年の市町村合併時、地域への愛着が強い住民たちは、行政区名に「田辺市龍神村」を選択。地元の人々とIターン、Uターン組の人々が力を合わせて龍神村の新たな魅力づくりに取り組んでいる。



- ①群馬県・川中温泉、島根県・湯の川温泉と並び、日本三美人の湯の1つに数えられる龍神温泉の元湯。湯に含まれる豊富なラジウムが肌をきれいにするという
- ②各地からのアーティストが移り住む「アトリエ龍神の家」
- ③Iターンしてきた藍染め作家・計良容子さん。仕事場の一角には染め上がった作品がディスプレイされている

- ④「龍神はーと」オリジナルの「柚べし」づくりに取り組む、原さださん
- ⑤⑥Uターンで龍神材の良さを生かした家具づくりに専念する松本泉さん
- ⑦龍神村の山あいには棚田が広がっている



新しいまち、新しい家、新しい庭。
土に触れる暮らしを始める



小舟木エコ村

持続可能な社会システムづくりの第一歩

環境と地域社会との共生

琵琶湖東岸に開けた商業と水郷の景観都市・近江八幡市の旧市街の西南、周囲を豊かな農地や河川に囲まれた一角に、二〇〇八年、環境と地域社会との共生を目指す「小舟木エコ村」がオープンした。各戸とも、ゆったりとした敷地に果樹が植えられ、十坪の菜園が備わり、ごみ用コンポストや雨水タンクも設置されている。〇九年四月末現在、八十世帯ほどが入居するが、その九割以上はオール電化。また、宅地の南側には小舟木エコ村関係者や周辺住民の耕す畑地が広がり、そこで収穫された野菜類は小舟木エコ村内で販売されている。

このエコ村構想はどのようにして生まれたのか。滋賀県立大学副学長でNPO法人エコ村ネットワーク理事長の仁連孝昭さんによれば、地球温暖化や水問題などで危機に瀕している「環境」に負荷をかけず、グローバル経済の進行と東京一極集中で破たん寸前の「地域経済」に活力を与え、人と人、人と社会とのつながりが崩れる一方の「地域社会」を立て直す手がかりとなる、持続可能な社会システムのモデルを「口で言うだけでなく」実際に滋賀県でつくるために、二〇〇〇年、大学や経済界、市民や行政関係者が議論するなかで具体的に立ち上がった。

二年後、最初の候補地が近江八幡市の現在地に決まり、

「エコ村憲章」を制定。また、内閣官房都市再生本部「環境共生まちづくり事業」に選定された。宅地造成は〇七年から始まった。エコ村事業法人・株式会社地球の芽の田中孝佳さんによれば、同社担当の区画では、「カーボン・オフセット」というしくみを利用して、造成工事に伴うCO₂を実質ゼロにしているという。各家庭で実践されている雨水タンクやコンポストの活用、農業を使わない菜園や果樹栽培も、いかに環境への負荷を減らすか、という取り組みの一環だ。現在、小舟木エコ村住民と研究機関が協力した「カーシェアリング」の導入を検討している。



◀自作のエコ村構想の模型を前に、小舟木エコ村への思いを語る仁連孝昭さん

琵琶湖畔各地でのモデルづくりへ

では、「地域経済」「地域社会」との関わりについてはどうか。仁連さんは、「近江八幡の周りは農地が多いのですが、ほとんどが兼業農家でサラリーを注ぎ込んで農業を維持している。そこで小舟木エコ村の住人と周辺の農家が農産物を通じてコミュニケーションでき、地域経済を安定させるしくみをつくりたかった」と言う。例えば、各戸の敷地に菜園を設けるのも、住人が作物を育てることで身をもって農業を見直してほしいから。「エコ村にとって大切なのは個々のハードよりもソフト。住人

- ①木の家に住みたくて小舟木エコ村に移住した小島澄子さん
- ②菜園づくりを始めて自然のすごさを実感したという川合紀之さん・恭子さん夫妻
- ③息子家族と孫家族、大家族で移住し二世帯分の菜園づくりを手がける大橋美智子さん



小舟木エコ村の南には、同村関係者や周辺住民が耕す畑地「百菜劇場」が広がる

がどんな考え、生き方で暮らしていくか」。さいわい、エコ村構想に共感した入居者ばかりなので、みんなが主体的に環境と地域社会と共生する暮らしをつくっていくという、という「自考自築」の基盤ができた、と仁連さん。

実際の暮らしぶりをみると、近江八幡駅前の賃貸から移り住んだ川合紀之さん・恭子さん夫妻は、自宅を建築している最中から菜園づくりに熱中。「今まで何とも思わなかったけど、雨が降ることがすごく大事なな」「ダイコンを植えた途端、モンシロチョウが卵を産もうと寄ってきて、すごいな」と実感。大津市から家族四人で入居した小島澄子さんは、「木の家に住みたくて、内装



小舟木エコ村は、約15haの土地に、戸建て木造住宅約370戸を建設、1000人ほどが暮らすまちになる

は国産のムク材。断熱を工夫し、深夜電力を活用した蓄熱式電気暖房器で冬も家中どこでも二十四時間ポカポカ」と言う。近江八幡市内の農家で、同居する息子さん家族、孫娘さん家族と二軒一緒に越してきた大橋美智子さんは、二軒分の菜園づくりを楽しみ、「今、人生、最高の幸せです」と笑う。

もちろん、仁連さんたちが目指した当初のエコ村構想がすべて小舟木エコ村で実現できたわけではない。重要なのは、新たな社会システムのモデルとなるコミュニティを、琵琶湖周辺のあちこちで、それぞれの環境や条件に合わせてながらつくっていくこと。「別の場所では全く違うエコ村ができると思います。そんなモデルが幾つもできてくると、私たちが目指しているものが理解され、受け入れられていくに違いありません」。琵琶湖畔に芽吹いたエコ村構想の今後に注目していきたい。

若者たちが都心近くに残る長屋を改装して店を営み、まちの活性化につなげている「中崎町」、山間の商業のまちを支える重厚な古民家の家並みの良さを生かしたまちにおこしに取り組む「宇陀」、《秘境》から《芸術村》への道を拓く「龍神村」、近江八幡の地域と環境との共生を目指す「エコ村」——地域の風土に根ざし、人と環境への負荷をかけないまちづくり、暮らしづくりへの取り組みの積み重ねこそが、関西における「持続可能な社会」実現への一里塚となっていくだろう。